

外来高齢者における医薬品適正使用の推進に向けた薬学的管理業務の質評価指標の運用に関する実証研究

串田 一樹 ●昭和薬科大学 地域連携薬局 イノベーション講座/特任教授



中間報告会後の親睦会の様子

要旨

本研究の目的は、厚生労働省により取りまとめられた「高齢者の医薬品適正使用の指針」をもとに開発された130種類の質評価指標を薬局で6カ月間運用し、ケアの現状把握及び指標特性を明らかにすることである。

薬局60店舗の協力の下、独自開発したWebアプリを用いて多剤併用の高齢患者456名に提供されたケアの質(ガイドラインの順守率)を評価した。

結果は、薬剤師が服薬指導時に確認すべき項目は平均17項目あり、うち実際に確認できている項目は平均9項目、ガイドライン順守率は平均56%であった。17治療薬別にみると、糖尿病ケアの質が最も高かった(順守率:74%)。

また、指標特性を評価し有用な指標44項目を特定した。加えて、薬剤師26名のインタビューでは運用上の課題として業務負担が多く挙げられた一方、ケアを数値化することによる薬剤師のモチベーション向上、及びガイドラインを踏まえたケアに対する意識の改善が運用上の利点として多く挙げられた。

今後は業務負担の課題解決に向けて質評価指標の電子薬歴への導入を検討し、アウトカムとの関連を調査する必要がある。

1. 背景と目的

高齢者は、生理機能の低下及び服用薬剤数の増加により、薬物相互作用等のリスクが高くなることが知られている。しかし薬剤師の資質のばらつきや多職種間の役割認識の相違により、医薬品適正使用が実現できないことが少なくない。

こうした中、近年Quality Indicator(QI)と呼ばれる質評価指標を用いて、ケアの質を定量化する取り組みが主に先進国で広がっている。QIは通常、薬物療法ガイドラインの順守率を%で表す。これにより経時的な質改善活動を可能にすることが知られている。

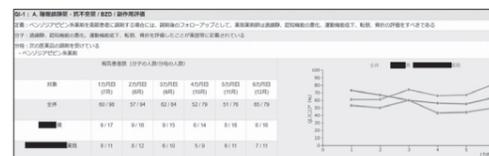
しかし、外来高齢者ケアのQIの開発・運用はこれまでなされていない。そこで本研究は、2018、2019年に厚生労働省により取りまとめられた「高齢者の医薬品適正使用の指針」を基に開発された130種類のQIを薬局で6カ月間運用することで、ケアの現状把握及び指標特性を明らかにすることを目的とした。

2. 活動の方法

本研究は以下に示す通り、混合研究法(6カ月間前向き観察研究・インタビュー)を用いて実施した。

【量的研究】

全国60薬局の協力の下、薬歴データを用いて、適切性が担保された130項目のQIを多剤併用の高齢患者456名を対象として6カ月



QIスコア閲覧画面

間運用した。独自開発したWebアプリを用い、各薬局はQIスコアを毎月報告・評価・閲覧することで、ケアの質改善活動を実施した。加えて、毎月オンラインディスカッションを開催し、薬局間でQI運用上の課題を議論した。

【質的研究】

量的研究後、薬剤師26名へインタビューを実施し、テーマ分析の手法を用いてQIの受容性、運用上の課題を分析した。

研究期間中、高齢者ケアの現状把握及び課題を共有する目的で、すべての医療従事者を対象とした報告会を2回開催した(参加者数:計92名)。ここでは、成果報告に加え、研究参加薬剤師6名による活動報告を実施し、パネルディスカッションでは出席者も交えて討論した。

さらには「COVID-19ガイドライン」「臨床研究に関する国際学会の紹介」「学会発表時のポイント」「実務研究の必要性」のテーマで国際講演を開催し学術的な学びの場も提供した。研究成果は既に計4回の学会発表(国際/口頭発表1回、国内/口頭発表3回)を通して、臨床・教育・研究現場へ還元している。

3. 現状の成果・考察

本研究により、高齢者ケアに関するガイドラインの順守率を患者レベル・薬局レベル・県レベルで評価することが可能になった(図1)。このようなデータの可視化は、経時的なケアの質改善活動や多職種連携にも有用であると考えている。

量的研究の結果、薬剤師が多剤併用の高齢患者に対して服薬指導時に確認すべき項目の平均は17項目(SD:4)あり、実際に確認し薬歴に記載できている項目の平均は9項目(SD:4)(全体のガイドライン順守率:中央値56%(IQR:38)であった(図2)。17治療薬別で見ると、糖尿病ケアの質が最も高かった(順守率:74%)。指標特性を評価すること

で、44項目の有用なQIを特定することができた(図3)。このうち、患者情報(10項目)及び糖尿病ケア(8項目)に関する項目が多いことから、これらのケアは優先的に取り組む必要がある。

質的研究の結果、運用課題として業務負担が多く挙げられた一方、ケアを数値化することによる薬剤師のモチベーション向上およびガイドラインを踏まえたケアに対する意識の改善が運用上の利点として多くあがった。今後は業務負担の課題解決に向けて、QIの電子薬歴への導入を検討しつつ、大規模スタディーを通して、アウトカム指標との関連について調査を進めていく必要がある。

4. 今後の展望

2021年内にデータ解析を終えて国際誌へ投稿する予定である。ケアの質を数値化するというコンセプトを電子薬歴に導入することで、日常業務の一環としてケアの質改善活動を実施できるかどうか、さらなる研究が必要である。ケアの質改善活動は、多職種連携が不可欠であることから、多職種連携の質も向上することが期待できると考える。加えて、現在進行中の世界共通で利用可能なQIの開発・運用の研究を通して、海外の薬剤師・臨床薬学研究者との連携強化も進めていく。

図1 有用なQI44項目のスコアの変動

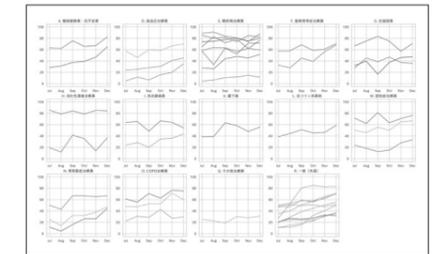


図2 薬局薬剤師が提供する高齢者ケアの現状

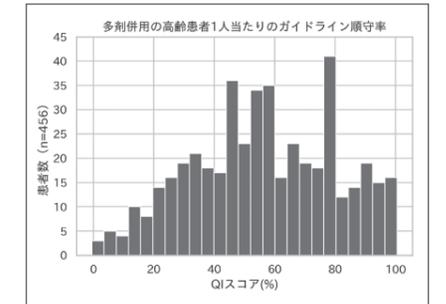


図3 指標特性フローチャート

